

外科醫法

三

				和書門類
九册	一。架	一三六函	四三三三號	

內閣文庫	
九函	四三三三號
六	九
和書	

番號	和 43131
冊數	9 (3)
函號	195 307



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



文庫部省

外科醫法

外科醫法卷三

佐倉 佐藤舜海尚中譯

煥衝論第二編

煥衝及煥衝轉歸詳論

前卷既下煥衝。其轉歸と總論せり。殊に爰に
に九以及履し。詳う小論をり。其事は月九別
て。曉さや。あうら。し。む。た。免。れ。り。所。以。て
第一。煥衝の経過をり時乃。遅速ふ。此病を別た

外科醫法

卷三

齊根清言

亡く急々性、急性、半急性、慢性等は、焮衝小分は
 急、急々性、急、経過急、一、二、三日、乃
 内小、死生、決、一、二、三日、急、性、を、二、三、週、此、日
 週、を、経過、半、急性、を、了、れ、り、永、く、慢性、を、數
 月、數、年、を、経過、り、焮、衝、を、り、を、り、
 第二、焮、衝、せ、り、所、若、く、ハ、全、身、生、機、の、元、枯、小、り
 了、小、を、別、り、ハ、單、性、銳、性、頑、性、壞、死、性、の、焮
 衝、小、別、り、ハ、
 單、性、焮、衝、を、他、病、を、雜、へ、ハ、單、性、の、病、小、前、卷、小
 記、せ、一、症、状、を、顯、り、多、く、ハ、只、外、傷、小、原、つ、よ、来

了、體、質、に、健、れ、る、人、に、これ、に、罹、り、や、其、上、を、り、
 銳、性、刺、衝、性、焮、衝、を、病、速、に、顯、せ、て、劇、一、く、なり、痛
 活、潑、一、て、赤、色、急、小、蔓、延、る、を、の、如、り、これ、と、血、水、
 肉、絲、と、も、乃、病、所、小、滲、出、つ、る、こ、と、を、病、症、乃、減
 速、も、亦、速、を、り、もの、なり、ゆ、急、に、進、ま、る、も、
 速、小、退、去、る、も、亦、滯、ら、る、性、を、具、ら、る、者、ハ、
 皆、銳、性、焮、衝、と、り、小、へ、し、これ、ハ、其、真、性、を、急、性、乃
 血、積、小、似、て、殊、小、知、覺、尤、ふ、り、性、活、潑、せ、る、人、を、此
 焮、衝、を、患、い、や、る、又、覺、神、經、を、多、く、具、ら、る、所、譬
 へ、そ、皮、膚、粘、膜、乃、よ、こ、し、曾、て、數、く、焮、衝、を、患、ひ、し

外科醫方

外科醫方

者、此焮衝を病にや以しとす。頑性焮衝ハ、銳性小反を有る症あり、其經過も徐く初めより痛なく、全身に其患及びわたりて、病所の著しく荒せり、危き轉歸を致すことあり。此性此病源ハ、これを病みそめり所の生機乃ち充枯不應して、かくいられる者なり。たとへば、神経少なる所、骨の内裡の焮衝のことあり、又神経の覺動尖せぬる者、かの神経熱或を麻痺病ハ焮衝のこととす。

壊死性焮衝を、一名惡性焮衝とす。小壊死小傾き

やその性を具ふる者なり。第三、焮衝小滲出しつる産物乃性、に原はてず、此は別れ、水性、肉性、膿性の焮衝とあるをへし。水性焮衝ハ、血乃中此水を、組織の間小滲出すも乃をり。肉性焮衝ハ、其初より血乃中此纖維素を滲出して、組織の間小肉ハ絲を成し、病む間小異なりたる症ありて、やもこれを險症を引出す者あり、此義膜喉焮衝のこととす。則ち是れり。膿性焮衝ハ、膿を醸すの性を殊小多く具へて、劇

一、これに致せしむるは、膿を醸すの勢、殊に
 熾りに起立をのり、これ自然小任せて、其
 これに轉ずるは機を妨ぐべからず。
 第四病所より蔓延するは、廣隘小應して、焮衝を別
 之れて、外表、ゴロ子ウス性又、子ウス性深滯の両性あり。
 第五病の近因小より別之れハ、正發續發此兩
 性あり。
 正發焮衝を、外損を受くる所、直ちに焮衝しめら
 者を、ハ譬へを、及傷のこゝは是なり。
 續發焮衝を、主病ありて、これに乗來たるは、焮衝

たり、痘瘡麻疹乃眼を犯して、眼焮衝を患ふる
 こと、特異性感傳性の焮衝也、亦此續發性焮衝
 乃内小屬し、ハ特異性焮衝といハ、全身に染渉
 する毒乃た、ハ焮衝の姿、尋常乃者よりハ、變
 りて、此病おのゝ限りて、顯るる症の必ありあ
 る者といハ、ハ徽毒乃、ハ全身惡液質とるあり、又
 瀕劑を多服して、其毒小中する人ハ、圖らず焮
 衝と病め、本病のよるを、ハ了る症を、其内小
 必顯する、ハ感傳性焮衝といハ、親しく交ハ
 する所、此器病を分ちあふといハ、ハ眼焮衝を病め

外科醫法

白 瘡癤疥癩

ハ、これ以外他眼小分は、又較節焮衝の形を變ること原
 第六、全身病乃を、焮衝の形を變ること原
 第七、焮衝を病に、百器百經小より、これを
 別くれハ、

皮膚焮衝、所謂羅斯といふ者、外表小あり、其
 内傷、殊に腸胃病、胆汁病小原つぎ来たれ者小
 ハ、大抵焮衝の組織の内小、外組織の裏又血水
 の滲出つれとも、其水の凝りて、形を結ぶと膿小
 化する者、これを稀めて、焮衝散を、其上外皮鱗屑
 乃ごとくありて、剥け落つるを、通例の轉歸とい
 是、其外傷及創火傷等小原つぎ生る者ハ、皮膚
 乃焮衝至て劇しく、轉歸も亦極小なり、
 粘膜炎、其滲出つる物より膿球は、出来た
 こと、いと早く、猶焮衝の初め小なり、已小膿球

外科醫法 卷三 瀉劑料會簿

を生長する者あり、焮衝の度劇しきに至せし、分泌
 乃機略々絶えて、却て血吐出つることあり、焮衝
 此度減じり、小従ひて、分泌乃機復い震い、粘液多
 く出来て、其内小膿球を混じ、此膿球を他所乃焮
 衝の組織の間へ、醸し出さるゝに少くも異なり
 所なり、膿球漸減し、分泌乃機漸どることゝに
 治りたり、されど一旦焮衝を病むた、粘膜を
 再感の患ひ頗る甚しくして、數々反復し来たは
 り、其質變じり、或を硬くしたり、或は軟うにたり、
 且殊々大氣不觸るゝ所なり、又を傳染毒の中に入

粘膜小焮衝多起す者あり、殊々急うわとす、
 皴膜乃焮衝を數多くある者あり、則ち胸膜腹膜
 較膜較膜名單々との焮衝を、日と見る所なり、此病
 多くハ急性あり、慢性のものを少く、忽ち劇度小
 至りて、血水を夥しく瀉出す者あり、且當時流行
 する病性と、各人體質とに従ひて、水膜乃外面
 之織素を産出し、遂にその化育して、水膜とあり、又
 水膜此内層即結組織と者なり、結ひ合は水膜と水
 織ふ不七織素を生じ、此膜厚くありたり、水膜
 焮衝の轉歸を解散其一所或は癒化膿壞死等々

水膜は正しく潰瘍小轉する者を稀して多く
 はこれと接したる組織は潰瘍小陥りて其患は
 水膜に分るるなり。
 纖維経焮衝を堅く腫れ劇しく痛む殊に病所を
 動かせば其の痛堪うをくやくも寸分は慢性
 小變りやばし、病劇しむ者を纖維をより織成せ
 うその器乃弾力を失ひ又を纖維素滲出する其所
 厚くなる等れ事少く、此病を識別する、輕き焮
 衝の數く反復し来つれハ、其所軟化小陥る者少
 くうらひたどへを、交較靱帯の強靱を失ふて較

此脱するうことし、外傷は外を痛風傷風専ら此
 病源とせらるなり。

蜂窩織の焮衝を極めて多くある病少く種々此
 病症と顯り、其轉歸も亦一様をらひ、蜂窩織の
 焮衝蔓延りて、血水を其間小漉出しつる者も急
 性の水腫は症を顯る、又虚性血鬱は續發病と
 なり顯る所の症を是に反して慢性水腫とれ
 う、蜂窩織の膿性焮衝を殊小多く見し所は、纖
 維性焮衝、脚肉、又慢性焮衝も亦寸分をら
 へつらひ、悪液質乃人、此焮衝を病めを忍ら壞

外科醫書 卷三

死に陥る者あり、
 動脈焮衝、動脈を焮衝し犯さるる性乃實小微れ
 ことごときを明らう小證したり、外科術若くを及創
 になつて日こふるの、動脈を甚しく傷ふも、其
 所よりけうへを患乃蔓延らるる小て見らるし、
 されども稀小を、胃寒又を創傷後、動脈焮衝不
 罷るる、其勢蔓延る者あり、但し此焮衝の膿は化
 成して、血と毒とを小いころを誠小をくれし多
 くを滲出しつる物れ、動脈を塞ぎ、其所壞死し陥
 る者あり、

静脈焮衝を、動脈焮衝より多し、静脈乃及創又を
 悪膿れととふ烈汁の、静脈乃內衣し觸せり、殊に
 此焮衝を生しやと、外傷ふよりすといへども、
 静脈乃内を行く所は血の、心臓小歸る、妨げら
 るる時小ハ、此焮衝を病むことあり、おつる静脈
 乃焮衝を、滲出つる物れいと早く凝りて、脈の内
 以塞まり、其通行を阻む者なり、治れて其後、晚
 心臓より遠く隔りたる所あり、膿を釀すこと
 せし、これハ血に混るること能はぬ、これ極め
 危き膿毒症を防ぐこと、良能の一術なり、

外科醫法

卷三

濟無精舎藏

し。而せと静脈焮衝小々。所謂膿性なり。者有て動
 とそれハ。静脈の衣間小膿を醸し。えうれいれら
 長静脈を圍む所ハ蜂窩織小々。齊く膿を醸し
 て。是は血中小雜之々。膿毒病を發する者あり。
 水脈の焮衝小罹るるを。猶静脈ハ。こし此脉
 外傷中毒れ。こり小犯されて。皮膚小透るるりて。
 紅色の線ハ顯るるを。則ち此焮衝なり。此紅線多
 くと。近き所小あり。水核ハ入りて。水核も亦焮衝
 長。凡水脈焮衝を。病源とれせざる者。去せを斬むく
 散るる常とせ。若毒物ハ水脈中に入りて。それよ

起る焮衝ありハ。水脈を圍み。蜂窩織中に
 危き化膿を誘出す。

水核焮衝を。水脈の焮衝せり時。病む者なり。はれ
 こも水脈犯されりて。獨り水核の焮衝小罹
 るるあり。毒物乃水脈を行く時ハ。ふれ小觸る
 る所ハ水脈ハ。犯さるるこり。水核小至りて。
 初て焮衝を顯るるあり。水核の焮衝を。頗る
 化膿と硬結とに轉る。その化膿小轉るものハ。
 水核の實質よりハ。これを被ふ所の蜂窩織小々
 行はるる。

外科醫法

癰疽疔毒論

神經を諸經中少て、尤し燠衝小罹ること少く、
 者あり、但し神經の衣ハ、纖維質より織成したれ
 ハ、此衣小を燠衝の著き易き者なり、病源病症皆
 纖維膜に類す、殊に傷風此病は源とれり、こと多
 し、ゆれを神經衣の間に、明汁脚血又を織素は滲
 出て、その衣厚くあるゆゑ、凡し神經衣の燠
 衝を、動神經の機を支ゆるゆゑ、小これ不應寸
 の筋肉を、其縮力を失ふ、たとへば顔神經は燠衝
 小ハ、其筋の力衰へて、口吻斜をいたす、こと
 し、若し覺神經燠衝を病め、ハ、痛出来て、其所より末

に向ひ、遠き所より及ひ、病乃源なりし所を却
 て痛少く、或を壓逼らるるゆゑ、小痛を覺之
 たり、ことあり、又覺神經は燠衝を、反應症を他の
 神經の司する筋肉中不起すことあり、これ燠衝
 小罹り、覺神經より、脊髓小傳へ、脊髓より更に
 動神經小致して、其命小應する筋肉は、動する
 わる反應症の顯るゆゑ、ゆゑ、たよを神經乃幹
 ハ、動覺の両維糾合して成れるゆゑ、燠衝
 に罹りし時、小ハ、麻痺と疼痛と併合せ、同時小反應
 症を顯るゆゑ、あり、神經衣燠衝の轉歸を、戒を

外科醫法

齊集精舎

解散して治り者あり、或はその衣膜厚く有りて、疼痛留りて定りて来り者、二種あり、麻症を遺りあり。

骨焮衝ハ、三種小別々へし、則ち骨衣焮衝、骨質焮衝、髓衣焮衝是なり。

骨衣焮衝ハ、纖維膜ハ焮衝小略々似たり、經過速なり者ハ、血ヲ雜せし汁を骨と骨衣との間小流出して、堅く緊く腫を發して、痛甚しむものなり、又此焮衝の化膿小轉し、若くハ外面潰瘡小轉し、若くハ骨の外面乃壞死を誘出する。

若くハ焮衝の産物化育して焮衝性骨瘤といふりの小癭ることあり、こハ骨をも硬結をれハ瘤乃ことハ者ハ發するあり、おれに善惡の両性ありことハ、猶皮肉小癌性硬結と焮衝性硬結乃差別あるに異なり、其經過乃徐き者ハ、焮衝の濃出物乃凝りて、忽ち骨小化して、病骨ハ漸々に太る者なり。

骨質焮衝ハ、多くハ慢性あり、惡液質乃人、これを患ひや、潰瘡癰疽に變りや、殊小較端ハ海綿質の所、病ハ然るを、長骨乃中央、これ

やめし壊死^疽骨に變りやけむなり。
 髓衣焮衝え。大抵慢性なり。髓管の内血乃
 中し。汁乃溢れ出て。これ々ために骨の内
 質膨れ。外層も從て變り薄くぬるなり。これと此
 病を解散の機動さやそ。溢出ける汁は漸く吸
 盡はれて。骨質腐のみとくに復りて。治りりの
 かり。但し吸収機過ぐれば。骨質や々萎細く
 ぬることあり。又骨の内質を潰瘡小轉し。外層を
 壊死小變ることあり。
 筋肉は焮衝を。世乃人の思ふ如く。少き者にあ

ら寸。筋肉焮衝を。これらたえお滲出つる物
 を。筋を圍み。蜂窩織乃内ふ。とくすれ。うや
 ぶに。見過して。其焮衝といを。只蜂窩織の
 みると思へり。されと生る間を。其所の運轉小
 くる。死す。後ふを。軟化せ。様ある。此見て。
 此焮衝ハ。忽ち劇ありて。痛甚小けは。堪う
 なく。著しく腫上らんと。其勢盛る者あり。
 此れハ。臍膜を。ありて。これを圍む。その腫んと
 す。勢は拒む。増く險症小轉る。えのれ

是。その尤も轉しやをき者ハ。圍之の蜂窩織化膿。膿小こそありけり。舌乃ここに蜂窩織少て圍をせり。所の焮衝を筋乃層間小膿の積りぬる者なり。又弛るき蜂窩織少て圍されたる筋ハ焮衝ハ。筋の内小膿を醸すことあり。殊小外傷小原つす。ゆる焮衝をゆるまくりこに諸醫筋肉乃焮衝論を多に。その説のあつらふ所多き中にも。縮力充ふりて堅く腫れ。痙攣搦搦を無發すり。こつ小。抑々焮衝のたえ小。軟化せり。筋肉をゆるる。症状を發すること能は。縮力を全く失

は。と云ふことをあらさる。小也。

焮衝治方

焮衝の治方を。是を解散せしむるをて宗といへし。ふれに次てハ。焮衝の産物をしりて。その化育此機を進めしむる。と膿を醸すの機を促しむる。と之ありけり。醸膿を促すの方を。膿瘡の篇小於て論をへく。産物の化育を進むるの方を。潰瘡と又創。この篇小於て説へし。爰小を獨り第一の主治たる所の方をりて。焮衝を解散せしむるの

手改、即ち消焮方々の者々、詳々に論及へし。
 およそ焮衝の性小應して、消焮の諸方を運らば
 へけども、爰ふ此方休別けて、四段とれ、第
 一方ハ病所此知覺の充ありし者、滅以不あり、第
 二方ハ毛脉乃縮力を進め、一旦太りし毛脉を
 震起して、舊の細さに復さしむるにあり、第三方
 ハ血質乃凝りやばくなりたりしを、解々にあり、
 第四方ハ焮衝の産物を吸盡さしめ、これを散
 らすあり、これハ消焮の方を數多あり、
 ことごとく見ゆれども、其大要を摘して論する時小

ハ、此四段の手改より外、はあらざるなり、各々
 症小應して、或は是を撰ひ用ゐ、或ハこれと合せ
 用ゝへし、今此四つの手改を、治術小當つ、三方
 小別ち、更ニ論及、あれ初學の者小曉りや、さうら
 一のめんうた、あれり、乃ら其一々、養生方なり、其二
 を藥石なり、其三々、外科術なり、皆各々主とする所
 あり、其効の異なり、所ある者なり、

消焮方は、之に用ゝる飲食ハ、都て淡薄の物れ
 るへし、辛熱の飲料、滋味乃食物、たとへて酒類、肉
 類を嚴しく禁し、只水と橙汁、覆盆子汁、酒酸乃類

減少し、和して、飲料とせし、與へ、又醋酸水を與へて効あり、食料少を水菱汁我類汁又菓實を熟く煮たる者ふて是せりとするし、身を疲うらむこと、心を傷めし事、とを害し、れより甚しきをせし、悉く嚴しく禁すへし、焮衝を患ふらぬの、それらの事あれ、思ひよらざる、不幸の轉歸、小陥るふとあれを多し、消滯方のうらみ、驗し著く他の者の代り、こと能くする者、瀉血方なり、瀉血方に二種の差別あり、一を全身の瀉血とし、小、静脈或は動脈顯

の動脈、小の 瀉刺して、血を瀉す、是全身に血乃量減減する方なり、其効普く全身小達して、殘る所あり、一を一所の瀉血、脚瀉血とし、小、水蛭吸角針刺割開方を病所小施して、其心小積る血をくわを、直ちに放つ方なり、これハ此兩方を合せ行はす、れハ、目さる効をばらた、事あり、刺給は、静脈を刺その方なり、近代普く行はす、一術あり、全身乃血を量、一時に減らその方なり、動脈を刺その術を、其術行ひ、又常に度小適つる、血を量を瀉し、た、

外科醫書 卷三

瀉劑

この事、學ぶに依りて、身は時を、うづる誤りの
 多く出来た者ありたり。我嘗て習せし
 一事に依りて、刺絡乃術の大略をいふるに、
 右より體内、小刺絡を行ふ所多き中、に頸靜
 脈、肘靜脈、跗靜脈、此三所なり。其内肘の靜脈を
 專ら、刺せり。肘乃靜脈を、此刺る所、又三所
 あり。斟酌して、其宜しき所を撰ひ、刺るべし。
 手拭を、縫に六重に疊ぎ、肘較の上、三三、拇指
 許り、此所を、一重を、けりて、外、小結ふべし。靜脈
 努張して、切脈乃常に變りて、變らざる、この間

之あるを、度とせし。緩緊を調ふるなり。緊きに
 過ぎ、血乃流利止る。ゆゑ、小多き漏せりた
 されり。乃ち術者、小對して、少く斜め、小側ら
 に開きて、坐す。右は肘、小行ふ。左は、術者
 ハ左の膝を立て、坐す。其立膝乃上へ、刺んと
 する。肘較の外面突起、小當る所を安き。左の肘
 此より、反、搦りて、左乃拇指、術者を刺んとす。靜
 脈乃、刺し、れ、口比上、小當る。靜脈の轉動を
 防ぎ、其餘乃四指を、上、上臂下部の外面へ、旋ら
 して、これを握りて、守り、右の拇指を

示指れ間小、ラニセト子持て、静脈に刺
 一、これと割開く、今ラニセトを抜くやい
 ろや、其上小置たり、左乃拇指あり、針口を塞
 き、血を受くる器をそこに接し、後拇指を除
 くれ、一滴乃血出せしむ、これと入れ、受器小
 八、これ、但し静脈、細けり、横小、太けれ、
 縦小、割るを法とす、瀉す所の血、少量乃度小適
 少、至せ、左に拇指あり、針口を塞き、右の手
 あり、手拭を解去し、血の止むを見、針口を
 冷水にて洗清し、撒糸を貼し、絆創膏小く留り、

縮帯を施し、これなり。

静脈を廣く割開き、血は頭小瀉せ、身體乃活
 機と多く棄ふりのれり、右に體内乃百器血の
 感動小より、各其官能を司り、これとれ、一
 時小其源を滅せ、これゆゑなり、犬の腹を割開て、
 下行大動脈を綁紮し、後支麻痺さるりの、如
 くにて、疾く走る、これ能は、術を大試し、此
 症に果して、證とす、此に血の後支小注せ、これに
 より、神経筋肉をの活機を失ふ、これなり、血乃
 脈内を激流せ、これ力衰ふれ、神經機能は血に

應して起すだけ絶つ者なり。これ小次で刺絡の効は、大なるを筋肉小瘡縮込起すにむすれり、これと今に至るまで世の人乃論せらる所れれ、知るの少なり、刺絡乃針口廣くして、血乃瀉す事、急なる時を、全身乃組織悉く縮むなり、これ只空氣乃壓力小たりて然るのいからば、組織中素より具する縮力乃震起して、瀉せし血乃容たけと、内部小於て填るゝて、これ所為なり、組織此縮力乃極めて劇しく起る者を、脱血小よりて虚憊極り、續て起す所の瘡

瘡あり、多し、意不應、動く筋肉も、共に縮動乃充め、者あり、刺絡少く血を失ふ時を、わう程小ハ至らば、皮膚蜂窩織及び巴連悉麻乃肉器縮んで失はる血乃容たけ小、為る休えて足せり、今組織の縮まり、あつて感して、神経の中心、脊髄動き、所謂反應症、これより復し、縮動乃露はる者なり、故小昔より衆醫士危き、燃衝静脈を割る時、小方りて、静脈を割る、静脈の廣く、これハ、静脈を割る、又を同時小静

脈を二所割りて、血液瀉せしむるを撃たり、絡を刺
 して血の迸り出て、其量を頓に減せり、血乃滴
 出でて徐々に其量を減せり、此を血乃減る量を
 異をらされど、母脈を灸せり、不至て、同一く
 らざらざり、血液頓小減せり、全身は縮力震起
 して、毛脈乃膨るれ、所を縮め、焮衝を制せり、の
 効著し、焮衝乃本性と考めり、に毛脈は縮力衰か
 る体主として、これに原つて来たる者あり、ゆ
 ゑなり、血液徐々に減る時、うしろの脈は縮力衰
 せり、凡脈内の血乃容を減る時を、脈外小あり、所

乃體水を吸入るて、其容乃不足たけを補ふ者な
 り、此機を名けける、透入といふ、頓小血量を減
 せり、透入は機起りに暇あらすして、立つて、ろに
 血液縮るるなり、疫疾のこころを絡を刺せり、も
 験一の著しく、顯せり、百器の弾力甚しく沈
 めり、小なりて、収縮の機醒り、これハなり。
 焮衝の初めに、絡を刺して、血を多く瀉せり、立所
 其筋を制せり、験一の神のこころ、これ焮衝
 の産出する物の源を絶つ、効はこれにあらす、活
 機復い震ふて、毛脈は膨るん、これハなり、治

むせ、い、なり、
 焮衝病、刺絡を行つ、少、其主治とす、所專
 ら二事に拘もる、其、一、焮衝の度の輕重に
 關り、其二、焮衝を病り、器の要害、小係もる
 り、焮衝の輕重を測るに、先、つ、望、觀、て、赤色
 疼痛、炎熱、腫脹、乃、劇易、を、識り、て、これ、を、定、む、つ、
 次、少、を、脈、至、小、顯、さ、し、反應症、を、診、て、これ、を、察、し、
 へ、し、抑、る、脈、至、小、反應症、と、あり、を、顯、せ、し、ら、その
 強弱、を、血量、に、貧富、と、生機、の、九、指、を、教、ゆ、る、者
 たり、ハ、意、を、注、へ、其、ハ、あり、へ、う、ら、寸、脈、至、の、強、緊

より、指、小、て、壓、せ、し、も、撓、ま、る、者、ハ、刺、絡、を、行
 ふ、へ、小、第一、乃、主治、小、て、少、も、忽、り、せ、ま、る、へ、う
 ら、さ、る、症、を、り、但、し、強、ら、に、脈、至、の、強、緊、を、り、さ、る
 是、小、て、刺、絡、の、應、否、を、決、し、へ、う、ら、し、右、よ、そ、人、老
 壯、ハ、血、脈、も、化、骨、し、て、常、小、緊、脈、を、顯、し、し、ら、り、
 又、焮、衝、の、外、小、事、あり、て、體、内、を、犯、さ、し、血、脈、も、亦
 從、て、充、ふ、る、こ、と、あり、又、鬱、悶、腸、胃、病、を、し、る、よ、り
 て、血、脈、感、動、せ、ら、れ、て、脈、至、小、強、緊、を、顯、し、し、こ、と
 あ、れ、ハ、れ、り、惡、液、質、の、人、焮、衝、を、病、む、時、少、を、其、毒
 の、動、こ、と、症、状、乃、顯、さ、る、こ、と、あり、ハ、刺、絡、の

効。よゝこれに制する事能くするなり。
 要害の所、焮衝小羅せ、弥々速に刺絡を行ふへし。晚くすれば効をくなく。焮衝全く顯せし者、或は焮衝已小其轉歸小移らむ時、治すといへども、奮のこゝ、全く復たさる少なき者あり。眼乃焮衝、腦の焮衝を見は、證とすりに足りぬへし。此二事の外、更小絡を刺して血を瀉す時、小方りて顯るる症を察して、刺絡の増く主治れり事。これと反覆し施す人、ふたふたを決する事あり。實小刺絡の應ずり時、小術の終り候待たて。

病者愉快を覺え、諸症立所小緩之。殊に病む所の痛之退く者あり。ゆゑこれを行ふ時、小醫士病者の側を離せし。西洋諸國小病院小主たりし、手出しせしれ、屬下の醫士小命りし、自症状を測りて、猶血を瀉す人、さうば、これをやむへし。う、松決をへし。

瀉せし所の血を、常に精しく檢るべし。焮衝や血を凝る事、乃ちくく。明汁を焮血含むこと少く、其血乃凝る時、表面小膝小似たる皮を結ふ。此物、纖維素より成る者あり。刀ふて七



切うし。血を突たる器。深けれ。甚しく縮す。う
ゆゆふ。その表面乃凹く。ゆるを常とす。若明汁
此煮せしを。凝らるるを。刺絡を復し行ふへ
うらさる。此徴とす。但し他症の止む事を得
し。ことあるとす。此論の外をくし。

瀉す所乃血其量と。預め定むへうら。病者の老
弱小後い。血乃貧富小後い。生機の盛衰小後い。
い。焮衝の軽重小後い。病所の要害小後い。又當時
此病乃流行性之後あり。同一うら。右を二十
年前小比ゆれ。今時を刺絡の要あり。症少れを

なり。蓋し英國人を常に肉食を重きうゆゆ。こ
血を瀉すこと多し。意尔人を菓實の食を
宗とす。血を瀉すこと少し。大抵
大人より瀉す所の血乃量と。六多或を八多より
少うらへうら。又十二多より十六多以上。過
るを稀あり。マルサル。人乃方ハ。焮衝小
刺絡を。病者假死を發せしを。度とす。
花ゆし。これ此方を甚た危あり。且ゆら。こ
かなり。血を瀉すこと夥し。假死を
發せし。又度小適へり。程乃血を瀉す

之至らるるも、既小假死を發せし者あれば、
 但し假死を發せしや、或は、たゞのあり者、しを預め
 横小卧し、血を瀉す、はに次ぎ、
 針口を巧みに施す時、患處致す、と甚少け、
 ごと、水蛭の吸口を皮乃數層破り、深し、所
 及ぶ者、然る時、をを免之、癰の増
 する、ことあり、故小癰衝せし、所を避け、隔す、所
 小貼す、と法と、をり、昔を、を患る、あり
 事を、ハ知らず、り、今も猶其弊を遺りて、癰衝せ

一、所へ、直ち、水蛭を貼す、ハ腫脹疼痛立、所に
 減し、或ハ全く去る、ハゆゑに、一時の功、ハ誇る者
 あり、とを、ハれ、とも一二時を過せ、ハ腫脹疼痛前
 小倍して起り、血の出る、と止む時を、吸口の創
 より反應症を顯り、ハて、症状増く、悪く、あり
ハ小事を、ハ知らず、ハり、痔疾、齒齦の、ハ知
 覺の、尤から、ハる、所の外を、水蛭を癰衝する、所へ
ハ、直ちに貼せ、ハり、眼の、ハ知覺の、銳こ
き器乃癰衝したる、周邊り、胞、顛等、ハ小接して、
水蛭を貼し、殊に其性痛風傷風、小原つ、ハ来、ハ

者るれい、知覺益々充まりてその害極りて甚く、
 醫術の制をりて能くするに至りて乃往々
 少うらひ
 小児を静脈も細きうゆゑに刺絡を施しうたき
 りのたり、されは是に代ゆふ、水蛭を用うへし、
 小児の軀、水蛭を貼すれは、それゆゑ落て其血
 乃止るべき事あれい、内臓の燠衝^ニ也、これ
 四支小貼するを勝せりといひ、大凡小水蛭を施す
 へむ法を、全身小反應症^{惡寒類}を顯はし、燠衝
 と危き燠衝一旦刺絡を行ひ、病者の諸力

沈して、其又復小堪さる者どれり、又水蛭の衝動、
 所謂反對刺戟とれりて、効を奏せん見、^シみのお
 者こも用うへし、水蛭を貼す、數ハ、少なきに
 尖ふへうらひ大人たりとも、一二箇あて足せり
 といふ論あれとも突おへし、取小足らさる説れ
 り、又多小過へ察らば、プロウ又甘イヌ、谷乃方は
 ひとく、百箇より百五十箇を貼す、小あらされ
 験し、^ニ之えりたりといひ、^ハも、誤りれり、^ハ多く
 らされハ効を得る、^ハら^ハ症ハ、刺絡をせり
 勝せりといひ、^ハし、^ハを水蛭乃落ちし後、^ハの

出血を促さへし。此れ要あり。こゝに於て、是を促す
 小を病所の便宜不應し。其所を温水小漬け。又を
 海綿手中をあふ。うに濕し。をこに覆ふ。こ
 小。百箇を。百五。小。明。も。こ。も。
 吸角方を、放血器機（舶来の器あり。貯へる。貯。字。也。其用。小。を。小。厚。し。て。用。て。皮。膏。を。敷。所。刺。し。吸。角。は。内。小。火。酒。少。許。を。滴。し。火。を。引。き。て。焼。し。其。燭。小。乗。し。て。空。氣。を。驅。出。し。刺。さ。し。所。へ。貼。す。り。方。れ。り。乃。ち。其。冷。ゆ。る。に。後。い。て。空。氣。乃。壓。力。小。て。皮。肉。を。吸。ひ。こ。む。ら。す。し。血。後。て。出。了。し。吸。角。は。内。対。及。氣。は。平。均。を。け。る。小。玉。を。て。止。

むれり、當時用うる所の放血器機あり、大小二種
 あり、其大なる者をハ英國器と云ふて、大量乃血
 を一時小放さへく、其効略と刺絡小次く、その小
 なる者ハ獨乙器と云ふ、數々貼して、望之乃量ハ
 血を放さへし。
 吸角方ハ効を、略水蛭ニ類寸、只其皮膚を犯さず
 このいど剥くハ、異なりと云、此れハ皮上ニ
 刺衝を起さしむる時、と誘導方此目的を要する
 時、この之行かす、たとハ傷風性、癩衝不用う
 るること、凡多量ハ血を放さんと、思小時、小

英國器を用ひ、刺衝誘導を主として用ひ、時ハ、獨乙器を善く寸、總て吸角を皮膚乃知覺尤小りたる所、と癩痕を忌む所へを、施すへうらま、衆醫く、小意以用ひ、者稀れり、余プラトク、地に在けり時、幾多の眼疾を療すたりけむと、面上に是を行ハ、さり一事ハ、當時の人乃よく知ると、そあつらん、
 手はくら一二所、小針刺して、小吸角を吸角を吸る者あり、あれを人工は、蛭をワめて、今に全く棄られ、く、ふそあら、血を放すの効、水蛭小

代少へ、小者少く、つらさるるなり。

割開方を、他術のこれに代るること能く、驗乃著しき方少く、ありけり、此方ハ、焮衝し、所此血多、其所より、直ちに漏りて、焮衝のたれ、小起る、腫乃緊し、き、弛むる効あり、又焮衝を圍して、展ひ、く、た、所を、緩むる効あり、筋肉と舌と乃焮衝小ハ、此方を施して、啻に其病を治むるの、く、ら、以、又命を救ふの一術なり、四支の焮衝ニ、ヒ、こ、り、此方の、く、体も、病支を保ち、全少く、へ、か、く、此術は、諸症小應、一用、く、こと、の、出来、た

ハ、實小外科術の進、昔小勝とるを觀つ
 一是也、およそ割開方此主治をり病をり
 察せん者、其所を割つことの廣く、且深き
 所妙とす、これと是より生じ、所此出血小、
 一々意を注ぐ、その要あり、こゝに於て、燃衝し
 たりし所の血脈、膨らむ、出血止まらば、死す
 ることあり、これ、
 消燼方とあり、用うる藥石、四種此効あり
 一、各其用を主とする者あり、
 其一、血中の成形力を減す。

腹膜胸膜乃燃衝し、れを、その産出しける物
 乃、膜外小積り、漸々凝り、假膜と成り、隣せり
 所小癒着し、
 其二、分泌排泄機を増非て、燃衝を導き、散
 せり、
 其三、燃衝の産物を解散せしむるなり、これを
 吸収機とす、
 其四、知覺機乃尤進を變革せしむる方なり、
 消燼劑と爲し、用うる藥石、多き中に、諸鹽類殊

小効あり、獨乙國少く、消石を譽たれ、鹽類、速に血中、小入り、血水、小和し、其纖素、小化せんとす、其勢を制せられり。

消石を、純煨衝あり、腸胃症の交るる者、小効あり、煨衝の初ニ、瀉血方と合せ用ひ、時々、其驗、莫小、瀉藥に勝れ、寸、但し、瀉藥を瀉血方乃生機、小連、其効を、支、事、ら、ん、り。

瀉藥を、腸胃に、鬱積物を、掃ひ、煨衝は、瀉血に、要せし者、又々、全身、小熱を、引出し、者に、用ひ、主治、心、其尤、用ひ、く、藥を、硫酸曹達、硫酸苦土

なり、其効のや、緩く、者ハ、磷酸曹達、孕礪酒石等、病者便秘の癖あり、者、此等乃、藥ニ、辨、那乃、浸汁を、加ふ、風邪傷風、小原つ、煨衝、礪砂殊、効あり。

消燼の効は、稜群を、藥を、吐酒石、小あり、つ、此、石、昔を、肺、煨衝、小の、用ひ、其効を、試たり、此、小、今代を、他、所の、煨衝、小、腸、小、恙を、時々、皆、用ひ、其効の、着き、を、吐酒石の、煨衝、を、治む、力ハ、腸胃乃、粘膜、を、動、皮膚の、發、を、起す、に、考られ、誘導の効

乃發せり。りの方り。若發されハ善徴ありて全
 治のわと期して待へし。されハ慢性焮衝ハ甘
 瀕乃外并瀕赤降瀕乃類を私く用ひ。こも流涎
 乃来るを忌むなり。瀕ハ水乃た地乃た。こも
 瀕劑小次て驗乃著る者ハ。沃驗小了ふありけ
 也。殊に惡液質小原つまゆる慢性焮衝小此を用
 ひ。ハ既小焮衝の産物乃形を成せり。りの以吸
 盡その効小至てハ他藥及みこ能ハさるえの
 れを。
 麻藥を焮衝小用うるを治術小於ていと難む。ハ

る所なり。是は用みん少は。達煉の眼を開きて。疑
 へし。ハ事と斷るにあらざれば。決して行ハへ
 らし。此効乃尤も當せる所を。病所の知覺機減
 せハ。後て焮衝の勢自ら伏る乃時小あはれり。
 此れを焮衝の初めに。大量の阿片は用み。その
 せに全く露れむとす。勢を斷らまらんと
 あり。此れと焮衝既小全く露せし。うへ。他の
 方あり。逼りし。血を決し。焮衝の産物乃出来
 らん勢ハ減せし。とす。うに認め。只神經乃
 知覺機尤り遺りたる者のみ。治めん。ために

外科醫法 卷三 三十一 淋病精論

用いれハ、麻藥効有、眼器、殖器、腹膜、乃工と、知
 覺の鋭い器、小宿、あり、焮衝の痛堪うたむ者
 少、時を測りて、阿片を用いれハ、速よ大効を奏
 す、麻藥乃内阿片を殊之慎みて用い、ト、菲沃私
 老利兒結、尔斯水ハ、其効緩く、共、不銳性焮衝
 用られむ、少、み、清涼鹽を合て、用い、ト、
 焮衝病を療は、に、總て、瀉血方を宗と、れし行ふ
 了、他、小求む事なく、藥石乃如き、を用い、ト、小及
 ち、以、こ、ソ、小者あり、これ皆、不學の輩、小、適應の
 症、小臨、こ、藥石を與ふ、れハ、人體、小、こ、も、緊要

を、血を、失ふの憂、なく、病乃、治す、こ、ソ、小、
 代、え、ら、る、る、なり、
 誘導方、亦、焮衝を、治す、の、一、良方、なり、是、を、皮上
 小行、小、こ、こ、あり、又、皮裏の、蜂窩織、小、ま、く、達、せ、
 む、こ、こ、こ、あり、其、効、力、は、達、せ、の、輕重、に、後、以、て、四
 種、小、別、く、處、せ、
 其一、を、皮膚、に、輕刺、衝、なり、此方、ハ、皮膚、に、焮衝、を
 起す、の、度、小、至、ら、る、る、なり、軟膏、硬膏、煉丹、水劑、の
 諸方、あり、た、と、へ、を、鹽水、醋酸、小、礮砂、を、合、て、こ、
 者、龍腦、酒、拔、爾、撒、安、窩、波、德、兒、多、弗、拔、實、利、膏、等、と



皮上貼す。ら。慢性焮衝の頑き者。ハ。持長ト行。少。大効あり。其ニ。皮膚を焮衝セ。心。凡。皮膚。焮衝。起。度。至。膿。至。誘導方なり。植物乃。野的。性。含。者。用。小。供。殊。效。此。細末。泥。煉。布。攤。貼。又。海葱。搗。碎。泥。作。貼。是。等。貼。皮膚。赤。色。の。頭。泡。と。發。す。置。け。續。て。惡。瘡。小。變。ハ。又。熱。水。に。漬。鏤。皮。上。不。置。

又沸湯の蒸氣。小觸。皮膚。小。輕。焮衝。を。起。是。等。皆。危。急。乃。間。小。其。効。果。ら。む。時。行。方。あり。其。三。誘導。乃。力。強。く。且。永。う。事。を。要。む。時。小。發。泡。方。打。膿。方。以。主。治。と。殊。小。焮衝。の。産。物。を。散。さ。望。之。あ。る。時。欠。へ。ら。さ。方。あり。け。發。泡。方。ハ。芫。菁。膏。を。貼。皮。上。に。泡。を。發。せ。其。泡。を。破。り。軟。膏。を。貼。若。是。を。打。膿。方。小。變。む。撒。昆。那。膏。若。く。ハ。蠟。膏。小。芫。菁。末。少。合。せ。貼。り。代。ゆ。べ。

かくかせし打膿方ハ膿汁比流出し醜體を為
 是者なれハ泡を剥去りし皮上ハ硬膏は貼る
 善しハ硬膏小膿乃洩出つるにせへとも八日よ
 り十日もくもふて治す者なり
 余ハ朋百氏乃方小倣ひて打膿を要せり發
 泡ハ泡の一所ハ小さく針を刺す水に絞
 其り盡し泡を破らさるやりに助け置きて油紙
 又を半紙をすく揉みぬりて貼るぬくなり
 此ハ泡の漸く萎む小後ハ其をハハ外皮出来
 たり二三日ありて速に癒ゆるなり

近年小至りてハ擦膏硬膏は製して皮膚小擦り
 て小疹を發せしむる方あり吐酒石膏ハ尤其力
 ありしゆゑ小普く用ゐらる此膏を疹を發す
 乃これらハ痛劇しく覺ゆる故小誘導乃効も
 頗る大なり誘導比力輕くて効比寛きハのハ巴
 豆油實艾答利私膏吐根膏吐酒石水外瀆水等
 發泡方打膿方ハ外皮小膿を引く乃術あり此外
 小皮裏蜂窩織乃打膿にて皮裏の蜂窩織小膿を
 引く此術あり疹少く永く行ふを却てよる
 一と云兩方共小其効小於ハ相同一其宜一

一、此撰いて、互小用うへし。皮裏蜂窩織打膿方に
 二方あり。一を皮裏乃蜂窩織ヲ割開きて豌豆
 豆創内不入ぬ。其癒をんこと。此妨けあり。此
 膿を釀こむむ。一を蜂窩織のうちに條布
 以貫き止めて、膿を引く。慢性癰衝を殊ニ
 此方効あり。其四小を、炷灸と烙錢との二方あり。炷灸を日本
 けらら。艾を程よく塊めて、皮上小貼。火を點
 して燃やし、其所に炭をなせり。誘導の効を、
 ともなせり。劇痛と炭痂乃落つるに

後して釀し來つる膿れ出つる。とによらなり。烙
 錢方ハ鏢を燒きて、皮上に貼し、其深き所にて
 犯して、活潑なる痛を起す。む。此れと其痛やい
 とよりの輕けを、續きて護らる。化膿を、却て夥
 し。かく痛と膿との異なり効小原つて、灸と鏢
 とは取捨し行ふへし。慢性癰衝の數月、留連を
 者少く兩方共小主治なり。

癰衝病所治方

癰衝を治りんとし、病所へ、直ちに行ふへし。醫
 方に四種あり。

其一を焮衝したる所へ、外感と遮らむるに用
うの方なり、たとへば、眼焮衝しを物ふて眼を覆
ふ者を作し、日光を避くらう如し。
其二を、炎熱を驅るの方なり。
其三は、温煖を與ふる方なり、糊劑、御湯、蒸劑是
なり。
其四を、藥力を達せしむる方なり、
熱を驅るの方ハ、焮衝は治むるに、いとも要する
一術ハ、下をわけて、病所ハ寒物を貼るハ、第
一を其知覺を減退、甚しむに至るハ、知覺機を絶

やその効あり、第二ハ、毛脉の縮力を促すの効
あり、これハ焮衝の初め、いとも、其所ハ明汁水血又
を織素に滲出すして、血積の之れ時々の間ハ、
殊ハ主治と云、此方乃驗、いとも著る者ハ、氷を
是を片々に碎き、布囊に盛りて、病所へ安んず、
或ハこれハ鈎垂けて、氷囊の一部を繞し、病所へ
觸しむるをいとも、乃ち病所ハ壓迫するの憂を
さたり、これハ焮衝劇しき時を、氷囊に當りたる
所、其壓力ハ壞死ハ轉るるにあり、意を用う
へし、わする憂を防ぐむを、數多く疊重し、熱



巾を籍きて、其上に氷嚢を安へ。又病所の邊り
小氷嚢を懸垂せて、其寒氣をもて冷やし時、
此憂をうへし。

氷片を雜へし寒水小。墊巾に蘸して、これを病所
小貼す。え、其効氷嚢小同し。病所を腫の力輕さ
ゆゑに、却てよき事もあらん。されど熾衝の
劇しき時、小氷嚢を勝せりとし、ゆゑ小とれせ
ハ、氷嚢をあつて、その憂をく。又病所と余毒と
併濕との、ゆゑはふことなげせはなり。故小病乃
初め、其勢旺れる時、小氷嚢は用ゐ、其勢や退

く依見て、寒水小換ふは適當とす。若氷乃
を、節少を、井水を代用うへし。その井水を數々
換へ新たむ。依よちと、盤中、小盛り、水を
永く換へ、その時を、病の熱は為小あつて、
寒暑針乃二度以上を針して、其効減をれせり。
又病所を寒水中に漬け、或を水、瀝は類、小水を盛
りて、病所小滴すものあれど、皆施し、かゝる術を
せハ、好くて用うへき、あをあら、そのなり。

鹽類を溶くして冷やす。水、醋水、と、その効
氷小及ハ、創所、小ハ行小へ、ゆゑ、英國、あてハ

寒瘧方に代へて、亞爾箇兒と水とに蘸せし墊巾
 預、病所小貼し、亞爾箇兒乃飛散るに乘し、其所
 乃熱を驅るたり、これと其効小至るハ、氷を雜ふ
 る水と及ハ、其上亞爾箇兒氣比病室小満ちて、
 病者を害るは此憂あり、
 外皮の焮衝、殊々其所輕き靡爛を兼たさるもの
 を、醋酸鉛糖頗る大効あり、これを水小解きて用
 うし、この製劑小二種あり、一を鉛糖を水小和
 せし者れり、これを鉛糖水とす、一をゴラール
 デルの削りて製しける方あり、鉛糖水小火酒を

すせし者れり、これを保護烏刺爾度水とす、創所
 小ハ禁ずるなり、鉛糖水を寒瘧を治ハ、只ハ消焮
 乃効あり、これをこれとんこれと微し、煖むハ、
 収斂乃効、と麻酔の効比専ら出來る者るれば、焮
 衝の性不應し、斟酌をへし、又これを煖めて、病
 所を覆ひ、數々換ふる時ハ、温瘧方小代つるの
 効あり、温瘧方小ハ二種あり、蒸劑と糊劑なり、此
 二種の焮衝を治むる効を、知覺機の充ちたる
 う制し、腫脹を弛め、皮膚の蒸發を進め、外氣乃病
 所を犯さず禦き、時候比變動を衛するにあらず、

殊小蒸劑を血積乃時比既小過去りて、滲出乃時
小至る者、こ知覺尤も、所の炊衝、纖維管、乃衣小
て被りしつる者、相趾の類、こに主治、こは、但し、ら
か、る所の病あり、初より蒸劑を用うるをよめ
し、こは、其他の炊衝あり、初め寒暄方を行めて、そ
の化膿、こ轉るに及びて、蒸劑小代へ行か、こ
又病者、こもや寒暄方あり、こ病者乃くつろく、こ
覺え、或を却て、ころわろく覺ゆる時、こを速
に温暄方小代め、こなり、こは、こ病者乃意を、こ
察し得て、寒温両方乃孰れ、こ當り、こ識り、こは、

用捨を、こ、

温暄方を、必ず化膿を促す、えのなり、こ小説あり
こ、こを全く據所を、論なり、此説獨し國より
起りけん、獨し國あり、こ化膿小轉し、こや、こ、炊衝
小の、こを、用う、こ、こ、佛國あり、こ、こ、普く、是
以用、こ、こ、炊衝の、悉く、化膿小轉、こ、こ、こ、
ら、こ、こ、證、こ、こ、
糊劑蒸劑と為、こ、こ、料、こ、こ、數種、こ、こ、要、こ、
所を、醫力あり、殊小衝動麻酔、こ、効あり、者、こ、供
こ、こ、蒸劑の料、こ、粘滑薬、こ、煎汁、就中蜀葵、

麦罌粟殼等乃煎汁、或を菲沃斯葉、莖葉、加密列
 花乃浸汁等なり、此等の汁を煖めて、これ小布片
 を蘸し、其蘸せり者、病所小安かり、これと速に
 乾き、且冷むるゆゑに、其上に蠟布少々覆ひ、
 油紙を用ひ、温氣を貯め、をよちしとす、糊劑の
 料、小、亞麻仁末、尤も善と云、これを沸湯少々
 煉り、温小乗して布片此上に傾け、瀉し、或は布囊
 小盛りて、用ひ供ふるなり、但し濕小過くへうら
 け、又熱きに失ふへうらけ、おれを製するに煮る
 者あり、これと惡むへう臭いの生るるゆゑ小

煮るへうらけ

糊劑を布片を籍うは、直ちに皮上小置け、亞麻
 仁より油出来て、肌を潤し、ゆゑ小、其効尤も
 大なり、布囊小盛る時、只其蒸氣と温熱此効の
 効、効乃著るは、望む人小、いふ小、其皮上小
 粘着くると、恐る人、但し意を用ひ、よく煉
 り、こゝ小、此憂もなかり、へし、一旦用小供へ、
 糊劑の料、復ひ用ひへうらけ、用ひんとて
 煖むは、惡き臭いの發すは、なり、糊劑を貼る
 上小、蠟布或は毛布、或は覆いて、その冷む

と乾くと防くべし。
 亞麻仁の外、小粉、燕麥、米糠、或ハ燕餅、母乃肉、等々
 多クテ、糊劑と製すべし。皆其効を亞麻仁小及い
 かし。乳汁七、亦糊劑乃料とをへうらし。速に
 酸小化し、病を害さることあり。疼痛を
 兼シ、燉衝ふ。麻藥の苜蓿末、菲沃私藥末、雜弗蘭
 等と多ク煉合せて、糊劑を作ると善し。又阿片酒
 液加へて、効めありものなり。
 燉衝諸症、多くハ亞麻仁一品をセテ、作り、糊劑
 少ク、足たりとし、貼て冷むると、七遅けし

ハ、他の藥料小勝たり。但シ製煉小ト意を用
 り。又それと施すにも、慎ミ重ク、その全ク冷め
 ざる前小、換ふへ、材料を新タ小煉た、熱度の
 適へる所と、手少テ試ミ、其後、靡ミ去りて、此
 小換りたり。
 糊劑ハ、燕劑ハ、その重さに違ひある。總テ糊
 劑の方を善とし、水く濕めて冷められし、燉
 衝する所、糊劑の重さに堪うる者少の、燕
 劑を善とし、
 燕劑の主治なり、諸病小、微温の浴方、又効あり

こゝあり、おれは毎日數度用ゐ、其驗一の却て蒸
 劑小勝さるへし、病症小たりてハ、麻藥衝動藥の
 煎汁、又ハ浸汗に加ふれ、別てよちしきあり、
 温蒸劑の應ずり諸症小を刺戟を精絞の油脂
 此と筆用も少く様り、又々布片小蘸し貼りて、其
 効もなうらひ、その品々、亜麻仁油阿列襪油、嬰
 粟殼油、酪、鹿角油等なり、
 痛風性、傷風性、羅斯性乃諸焮衝、及ハ病毒乃排泄
 となり、發しめ、焮衝、おと、蒸劑と様油方とを
 通例病者乃堪うたよ者なり、乾癢方効あり、乾癢

方とい布片、又々毛布をたく、火おて煖め、病所小
 安なり、又藥囊を安し、又澱粉の糲を布囊
 小盛し煖め、安しあり、又散藥を撒くもあり、
 か、諸方あり、其効小至る、異なり、こゝこれ
 あり、



外科醫法卷三

四十二



外科醫法卷三終

存誠林先生藏板

泰西醫方二十四脈表

一枚摺

侍醫法眼信良坪川先生譯

侃斯達篤氏內科書

全一百八卷

侍醫法眼信良坪川先生譯

新藥百品考

初編二冊
二編二冊

全四冊

大博士佐藤海先生譯

斯篤魯默兒砲殘論

全二冊

大博士佐藤海先生譯

外科醫法

內編十五冊
外編廿二冊

全三十七冊

越中佐渡三良先生著
和蘭藥性歌
全二冊

東京坪井芳洲先生譯
醫療新書
全三冊

倉次元意先生譯
眼科摘要
全部九冊
近刻

時醫法眼松本先生藏板
解剖羅旬語加類多
骨部

西洋風夷入
漢字和譯附
英語可出多
山内氏藏板

洞海林健卿譯補
穴疔篤兒藥性論
全部十八冊

侍醫西々學教頭三蘭晴松本良順誌
隱士樂齊山内豐城校閱補註
養生法全三冊

玄端杉田先生譯
健全學
全部六冊

作樂戶知常先生譯編
西洋英傑傳
全六冊

大學東校恒太郎石黒先生譯
廣藥鑒法
全二冊

大學東校 櫻井 末田先生譯補
袖珍藥說 全三冊

大學東校 恒太郎 石黒先生譯
藥品溶解表 一枚摺

大學東校 石黒先生譯述
官 化學訓蒙 全十冊

大坂醫學校 北獨英氏
官 日講記聞 全冊數不定

大學東校
官 日講記聞 全冊數不定

大學東校 四代先生譯述
切斷要法 全一冊

百太郎 佐藤先生譯
大平海新報 冊數不定

基五十川先生譯
林戰要錄 全三冊

菱湖卷先生書
三體千字文 四帖

箕作少博士譯
英語手引草

滿斯歇光篤氏口授
官板
病理畧論

全二冊

中助教久我克明先生述
官版
痘龜鑑

全一冊

石黑忠惠先生譯述
虎烈刺論

全一冊

銅鑄
萬國地圖



大學東校
官版御用所

西洋醫書

東京馬喰町三丁目

發兌書林 英蘭堂 嶋村屋利助

